

E-9 瀬戸内海島しょ部の生活環境に関する基礎調査

オ1報 生活行動と生活圏 —大三島の場合—

桃山学院短大 ○佐々木ひろみ 松山東雲短大 大原早苗 山口幸恵
広島女学院大短大 富士田亮子

■目的 オ1報の目的に基づき、本報では、日常生活行動圏のうち主に購買圏と医療圏をとりあげ、その実態把握を通じて、人口減少に直面する離島の生活圏構成のあり方を考察する。

■方法 現地観察及び聞きとり調査を併用し、業種別店舗、医療施設等を地図上にプロットした。9品目の商品についての購買圏と、治療の程度差による医療施設の利用圏は、アンケート調査法を採用した。有効部数は534。有効率81.2%となっている。

■結果 ①購買施設のうち、よるお屋的な日常食料品店はどの集落にも立地しており、集落内依存率は極めて高いが、現状の施設に満足しているわけではない。ヒアリングの結果から判断すると、閉鎖的な小集落の村づきあいの複雑さも無視しえないと考えられる。②島内の中心商店街へ行けば、一応あらゆる商品が入手できるが、選択性、嗜好性の強い商品の購入に関しては、島内依存を越えて、直接愛媛、広島の中小都市に結びつき、島外依存の形をとる傾向が認められる。特に、海上交通に恵まれた港のある集落にこの傾向が強い。③医療施設は個人医院が島内に5軒あるが、うちの軒は一地区に集中し、入院着者は受けつけない。公的な医療施設は皆無である。このような状況を反映して、医療施設は島外依存を余儀なくされている。病人がバスや船を乗りつき長時間を要して通院しなければならない事実は、二重に苛酷な問題を含んでいるといえよう。